



馬耳東風

気がつけば、もう10月の最終日。あっという間に過ぎていく日々の流れに少々の焦りを覚えながら、この原稿を書いている。つい先日まで半袖で過ごしていたのが嘘のように、朝晩の空気が急にひんやりとし、街には金木犀の香りが漂いはじめた。季節の変化がこれほど急激に感じられる年も珍しい。

今年の夏は、観測史上に残る酷暑だったと世間ではいわれている。だが、問題はこの異常が「一時的」ではなく、もはや「日常」になりつつあることだ。気象庁の統計をみても、猛暑日の連続記録は年々更新され、熱帯夜が秋口まで続くのが当たり前になってきた。動物も人も、気候の急激な変化に少なからず疲弊し、自然界全体がゆっくりと順応しきれずにいるように感じる。もしこの酷暑が来年以降も常態化するのだとすれば、私たちは生きものとしての生き方そのものを問いかける時期に来ているのかもしれない。

そんな折、NHKのドキュメンタリーでスリランカの野生ゾウの問題をみた。開発の進行によって森が分断され、ゾウが食糧を求めて人里に現れる。農作物を荒らし、人を襲う被害も後を絶たない。神聖な存在として崇められてきたゾウが、今では人々の生活を脅かす存在になっているという。村人たちは電気柵や花火で追い払うが、根本的な解決には至らない。人と動物、どちらも生きるために必死なのだ。

この光景は決して他人事ではない。今年、日本でも野生動物の問題がかつてないほど深刻化した。環境省の推計によれば、ニホンジカは全国で約300万頭、イノシシは約90万頭に達し、個体数は30年前の数倍に増えた。熊の出没件数は過去最多を更新し、人的被害は年間200人を超える。農作物被害はシカとイノシシだけで年間およそ170億円にのぼるという。人里に下りてくる動物が増え

た背景には、里山の荒廃や高齢化による管理放棄、気候変動による餌の不足など、複数の要因が重なっている。

本来、動物が「人の領域」に侵入したのではなく、私たちが「自然の秩序」に深く踏み込んでしまったのだ。便利さを求めて開発を進める一方で、自然と人の緩やかな境界線が失われていく。結果として、人と野生動物が互いに居場所を奪い合うようになってしまった。

獣医師は、生物学と環境科学の狭間に立つ職業である。動物の命を診ながら、同時に自然界全体のバランスを感じ取る感性を持たねばならない。人と動物、環境の健康は本来一体であり、そのどれか一つが損なわれれば他も崩れる。近年唱えられている「One Health（ワンヘルス）」の理念は、まさにその根幹を示している。

スリランカのゾウの姿も、日本の熊の出没も、突き詰めれば人間社会の在り方を映す鏡だ。どのようにして共生を実現するのか、その答えは、科学技術の進歩よりも、むしろ人間の謙虚さの中にあるのかもしれない。自然との距離をどこに保つか—その問いに敏感であることこそ、獣医療に携わる者の務めであり、同時に社会全体の責任でもある。

この一年を振り返ると、世界各地で「人と動物の関係」が問われ続けた年だった。気候変動、感染症、戦争—どの問題の根底にも、命の共存という共通の課題が流れている。

そして来年4月、東京で世界獣医師会大会が開催される。世界中の獣医師が集い、One Healthの理念のもとに未来を語り合う。そこでは、国や地域を超えて「共生の知恵」を共有することが求められるだろう。私たちがどう自然と向き合うのか、世界が注目している。

酷暑と動乱の一年を終えるにあたり、動物と人がともに生きる世界を守るために、私たちは何を学び、何を残していくべきか。

自然の声に耳を傾けながら、新しい年を迎える。

(も)